
【全年齡版】好きです、付き合ってください。

透風真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

【Nコード】

N1799Z

【作者名】

透風真白

【あらすじ】

可愛い顔立ちでふわふわの茶髪、猫っ毛の彼は、学校でちょっとした有名人。そんな彼から告白をされました。どうしてだろう。だって私は、女なのに。同性愛の言葉が作中出てきますが、直接的な描写はありません。当作品はボーイズラブではございません。ご了承ください。ムーンライトノベルズにて連載中の同タイトル作品の全年齢版になっております。同じ作者の作品なので無断転載はございません。

第1話（前書き）

こちらだけ読まれていた方は、お久しぶりでございます。お待ちせ
致しました。楽しんでいただけましたら幸いです。

第1話

「好きです、付き合ってください」

お決まりの文句を言われ、はあ、と短く反射で声を発した。

どうしたものだろうか。目の前の光景は実に信じ難い。というよりも、信じなくて良い。と、誰かが告げている。いや、私の頭には特に何も住んではないが、いわゆるあれだ、自分会議というか。そのようなものだ。

昼休みに呼び出され赴いたのは人気のない校舎裏。ここまでくれば大抵の人間はどんな用向きか察しはつくのだが、目の前の人間を前にして、それはありえないだろう、と結論を下した。

それは私自身が異性に好意を示された事が皆無であるからだとか、容姿、人格共にごくごく一般的かそれより多少下ではないかと自負しているからであるとか、高校2年生にもなって発した言葉の意味を正しく理解していないほど純情であるとか、そういった私自身の問題で結論を下したわけではないとどうかご理解いただきたい。

緊張した面持ちで私を見つめる彼、在籍クラスはどこか忘れたけれど、同学年の佐藤昂君。^{さとう けいくん}

接点は恐らくほとんどないだろう。同じクラスになったこともなければ、何かの係で同席した覚えもない。どういうきっかけで私を知ったか。そういった細かい事はひとまず置いておこう。

何故、私が彼を知っているか。

それは、彼が学校内の有名人であるからだ。

「……じゃあ、帰りはいつしょにかえろう」
「へっ」

頭の中で色々と整理していたら、目の前の彼が満面の笑みでそ

んなことを発言してきた。

「おや、どうしたことだろう。なんだか彼がひどく輝いて見える。頬を染め瞳を潤ませ、まるで乙女のようににはにかんでいる。この瞬間を写真に収めたならば、男女問わず買ってくれそうだ。佐藤ブロマイド、一枚いくらだろう。儲かるだろうか。」

「それじゃあ、またあとでね！」

嬉しそうに手を振って去って行く彼に慌てて声をかけようとしたが、驚きのが勝って、これは最初の返答で男女交際を承諾したととられているなとわかってはいたのだが、私はそれほど真剣に呼び止める事をしなかった。そもそも、彼も本気なわけではないのだから誤解をといてあげようと親切心を發揮してやる気にもあまりなれなかった。

だって彼は、男性しか愛せない人間であるはずなのだから。

ふうむ、と顎に手をやりながら私は校舎へと戻る。あまりぼんやりしていると、昼食を喰いっぱぐれる可能性がある。正直、空腹をほっておいてまで挑むべき疑問ではない。

図書室へと戻れば、すでに弁当を広げている友人が興味があるのか、戻って来た私に話しかけてきた。

「佐藤君、なんだって？」

当然くるであろう質問に、私は困った顔でお弁当を広げつつ、首を傾げた。

「うーん……わかんない」

期待はずれな私の答えが不満だったらしく、ぴくり、と片眉を上

げ、ふうん、と声をあげる友人に、付き合ってくださいとは言われたんだけど、と正直に話した。すると友人はよほど驚いたのか、口をあぐりと開けて固まった。なんとも珍しい姿である。

数秒待ってもそのままなので、食欲旺盛な私は友人の弁当箱にあるウインナーへ手をつけた。律儀にタコ型になっているそれを見て、友人の母はちよつとした所で芸が細かいな、と感心する。全体的に女の子のお弁当といった風情でとても可愛らしい。自作している私の今日の内容はのり弁当だ。弁当屋に並んでいたら美味しそううつるだろうが、女子高生のそれとしては少々彩りが少ないかもしれない。

戦利品を口に含んで咀嚼した所で、やっと我に返った友人は私を無言で睨みつけると一気に冷気をあびせてきたがさもありません。絶対そうだとは言わないが、所詮この世は弱肉強食、と断言してしまった人もいたではないか。

とはいえ好奇心が勝ってやらかしてしまった悪戯。さらに怒らせたくはない相手を怒らせてしまったのは事実。私が無言で卵焼きをさしだせば、友人はころりと機嫌を直した。

「……でも、それってありえないでしょ？」

まだおかずが入った状態のまま喋るのは少々行儀が悪いが、話の流れを切ってまで今それを指摘する必要性を感じなかったので私は心に留め素直に頷いた。

「まあね」

「千絵子ちえこはなんて返事したの」

「そこ」

友人の質問に、私はか、と目を開く。

そう、つまりはそれが問題だ。先程たいした問題じゃないと一蹴

したがそこはそれ。空腹の前には瑣末な事柄であつたがもりもりと腹を満たしていけば冷静な思考も戻るというものだ。相手が本気でないにせよ、承諾してしまった以上面倒な方向へ転がる可能性は高い。

難しい顔をして弁当を貪りつつ説明すれば、なるほど、と友人が頷いた。

「つまり、なんとなく声出したらそれがイエスという意味にとらえられた、と」

「そう、それ」

「変なところで抜けてるのよね、あんた」

苦笑して私の頭をやんわり叩く友人の大人びた表情に一瞬見惚れながら、この友人はとても美人なのである、私はぼんやりと考える。とにかく、告白がまがいものであるのは間違いがない。だからそこを指摘すればいい。そうすれば私は解放されるはずだから。

解放。はて、私は一体全体何にとらわれたというのだろうか。首を傾げながら物思いに耽る私は、とりあえず食べちゃえば、という友人の声に反応して食事を再開した。

先程の友人との会話でわかるとおり、佐藤昴氏のそういつた恋愛観は、実は学校中に知れ渡っている。なぜかといえば、ある日ある女子から告白をされた佐藤君が、につこりと微笑んで「僕は男性しか愛せないからごめんね」というお断りの返事をしたのである。

それから新たな噂が流れ、どうやら佐藤君は同じクラスの幼なじみである男にずっと懸想しているらしい、と知ってから、一部すきものの女子はそれに興奮を覚え、その他の人間も変に面白がって学校全体がそのふたりを応援する図が成立してしまっている。

「……あれ、てことは私は邪魔者になるのか？」

昼食を終え歩く廊下で、腕を組みつつ眉間に皺を寄せる。

学校全体の敵にも成り得てしまう状況に、私はちよつと心穏やかではない。ひよつとするとこれは思った以上に深刻なのだろうか。

これはあくまでも仮定だが、たとえば、たとえば何か、私に声をかけねばならぬ事情があった。私ではなくても良かったのかもしれない。とにかく、異性に告白せねばならない窮地に佐藤君が立たされてしまったでしょう。そうして、告白された私が、「いいよ」と誤解にせよそうやって返答してしまったという事実が今はある。当然、佐藤君はお付き合いをするしかない。みずから告白したのに、了承されて手の平を返すのはおかしい話だからだ。

そもそも、断られる前提だったのかもしれない。全校生徒が噂を知っているのだから、断られると思うか、疑問を呈すだろうと予想するのが普通だ。ひよつとすると、想定外の結果に私以上に彼が狼狽しているかもしれない。

そこまで思い至って、なんとなく悪い事をしてしまったか、と気になった。

いや、多分この場合、悪いのは佐藤君になるのだが、のつぴきならない事情があるのなら私はそれを聞くくらいの見は持ち合わせている。気はそうそう短いほうでもないし、今現在私に想い人がいないのも一因だ。誤解されて困る相手がいなければ、焦る必要もない。

ひよつとすると、好きな男性に何か言われたのかもしれない。へんな賭け事でもしたのかもしれない。あるいは。

とにかく、現段階ではあれこれと思考を広げすぎても仕方がない。ある程度の想定をして準備をし、彼の話を聞くのではないか。

教室に戻って席に着いた私は、そういった方向性で話を纏めていた。

「のだ野田さん」

放課後の教室にわざわざ迎えに来てくれたらしい佐藤君を見て、クラスメイトが不思議そうな顔をそれぞれ私に向けてくる。今まで接点など何もなかったのだからそれはそうだ。

佐藤君は、とても可愛らしい顔立ちと茶髪の柔らかい猫っ毛から、どこかなにかの動物を連想させる。背はそれほど低くもないが、見た目通り性格もひとなつこい雰囲気があるからか、皆に愛でられている傾向がある。

恐らく、彼が同性愛者であると公言しなければ、もっと頻繁に告白をされていただろうし、女性をちぎってはなげ、なんてことも出来ただろう。本人がそれを望むのかはわからないが。いや、男性だって、付き合いを了承するひとはたくさんいるかもしれない。

そんなしょうもないことを考えつつ、名前を呼ばれ無言で彼の前まで歩いていくと、佐藤君は微笑みながら私の手を取った。

少し驚いて身体を強張らせると、目の前の佐藤君が表情を曇らせた。

彼に動物のような尻尾が付いていたならば、きっとしょぼん、と萎れていたに違いない。泣き出しそうな顔をしつつ、弱弱い声で私に問いかける。

「嫌だった……？」

哀しそうなその声に、私は無言で首を振る。そもそも、強く拒絶する理由も見当たらない。別に私は彼を嫌いではないし、手を握るくらいで頬を染めるほど男性を意識してしまうわけでもない。

それにしても、解せないのはこの行動だ。

嫌々付き合っているのなら、こんなことするのだろうか。私の言動に一喜一憂するのだろうか。それとも、これもなにかの条件で、演技をしなければならぬ理由があるのだろうか。

考えつつ辿り着いた昇降口で、靴を履き替える。つながれていた手が離れて安堵の息を吐き出したということは、なんだかんだ多少

緊張していたということだろうか。心に余裕が出来た所で、私は口を開いた。

「佐藤君」

「なあに？」

相変わらず微笑んだまま、靴を履き替えた私の手を再度取る佐藤君。こうやって異性に触るのは、彼は嫌ではないのだろうか。

「まずちよつと謝罪しておきたいんだけど。私はあなたのお付き合いを了承したつもりはないの」

「え？」

「そもそも、佐藤君は私が女性だと知ってるはずでしょう？あなたは異性を恋愛対象として見れないんじゃないの？」

無言で固まる佐藤君の前に、私はとりあえず頭の中であれこれ考えていたことを口にしてみる。

「私、佐藤君が言ったことにびっくりして思わず声あげちゃったんだけど、それを勘違いして了承の返事にとっちゃったんだよね？それは謝罪させて、ごめんなさい。ただ、何か事情があるんなら、聞くのはかまわない。罰ゲームとかで告白しなきゃいけなかったとかそういうのなら、今すぐこの場で終わらせよう。好きでもないのに付き合ったりするのは苦痛だろうし、佐藤君が好意を寄せてる人に色々と誤解されたら嫌でしょう？」

伝えたいことをとりあえず伝えて、彼の反応を待つ。すると何かを思案しているように顎に手をやり黙り込んだ佐藤君は、しかし一分もかからないうちに顔を正面に戻した。真剣な表情で私をみつめる。

「わかった。本当は……何も言わないでおこうと思っていたんだけど、それは卑怯だね、ごめん。覚悟して事情を全部話すよ」

真剣な表情になった彼につられて、私はごくろ、と唾を飲み込んだ。

「でも、ここでは話せないから……場所を変えよう」

頷きながら私は彼にひかれ歩き出す。しかし、やっぱり手は離さなくていいのかな。私は気になって訊ねると、そのままでもいいんだと微笑んで答えられた。

ひよっとして、事情とやらにこれの理由も含まれているのだろうか。少しうずく好奇心が、多少彼の言葉を急かすけれど、話してもらせることにはわりはないのだから、と無言で彼と帰り道を歩いていた。

第2話

季節は初冬だけれど、今日は春のように暖かい。小春日和というのは、一体いつからいつの言葉であったかわからないから、心の中でも使ったらいけないわかないし、なんて思っていたら、目的地に着いたらしい。少し前を歩く佐藤君の足がぴたりと止まった。

見れば、なんの変哲もない公園だった。遊具もそんなには多くないからか、夕日がぽっかりと浮かぶ空のこの時間帯にはもう子どもはいなかった。カップルが訪れるにしてはまだ早いかもしれない時間で、つまりは誰も居ない空間のベンチに、すすめられるまま私は隣りあわせて腰かけた。

離された手を一瞬視界に留めてから、佐藤君へと視線を向ける。

佐藤君は、正面を向いてなにやら考え込んでいた。

恐らく今は声をあげないほうがいい。彼の言葉をじっと待った。

「……知ってた、んだね」

「？ は」

ぽつ、と呟かれたその意味が一瞬わからなくて、思わず短い返事のような声を発してしまう。そんな私の曖昧な音に困ったのだろう。疑問符を浮かべた顔でこちらを見てくる佐藤君に少し慌ててごめん、と返した。

「意味がわからなくてだね。ええと、知ってたとは？」

「あ、そういう喋り方が素なんだね。そっちのほうがくだけた感じで僕は嬉しいな」

いや、今そんな話じゃなかったはずですけど！？と、思わず脳内でつつこんでしまったが、口に出していないから問題はなからう。

確かに、先程は少々気取った話し方ではあつたろう。けれどもほぼ初対面でありながら巻き込んだ責任感からなのか、彼は私に重大な何かを話そうとしてくれている。それならば、私も本来の姿で臨むのが礼儀であろう。と、思わなくもない。

いいや、単に勝手に素うどんな私が出ただけである。言つててうどんてなんなのだろうか、とやはり自身に問いかけたが、所謂その場の勢いであつて、深い意味はないよ、と回答された。そうですか、わかりました。

夕日に照らされる空を一瞬見上げ、美味しそうな色である、と食欲ばかりに結び付けたがる思考を少々叱りつつ、私は佐藤君へと向き直った。

「素とか素でないとか、今は置いとかんかね？とりあえず、さっきの。どういう意味なの？知つてたんだねって何が？」

私の言い様にしょぼんとしながらも、再度の質問に佐藤君はああ、と頷く。

いや別に、本当の私なんて知らないくせに、とか素とか素でないとかそんなの知らないよ、とかそんな風に思つていたわけでは決してないんだ。そんなに情けない顔をしないでくれまいか。悪い事をしてしまつたみたいだ。ただ、目の前にぶらさがつたままの疑問を優先させてしまっただけなのに。言い方が少しきつかつたろうか。

ああ、と言つてから、彼の言葉がどうにも続かないので、私はぱたぱたと左手を上下に振つた。あらいやだ奥さん、とかおばちゃんがやつてる仕草そのものだ。それにたいして別に若人である私はなんら抵抗を感じない。ちなみになぜ左手なのかと言つたら私が右、佐藤君が左側に座つたからだ。

「あのさ、佐藤君。別に私は言われて憤慨したわけではないのだよ？ただ、さっきの言葉が氣になつちゃつただけでさ。この喋り方が

お気に召してくれたんなら私としても気が楽だよ。かしこまんなく
ていいってことなんだし」

わはは、と笑い声も付けながら言えば、佐藤君は萎れたしつぽを
ぶんぶんと振り出した、ように見えた、実際に彼の尻から尻尾が生
え出したわけではない、ので、私は安堵の息を吐く。

というわけで、仕切りなおした。なんだかなかなか先に進まない
ではないか。

「知ってたんだって言うのは、僕の恋愛対象が、その」

言い淀む佐藤君の言葉を引き継いで、私は声をあげる。

「同性愛者？」

「……知らないんだと思ってた」

「学校内で知らないひとはいないと思うけど」

苦笑する彼に、私は頬をかく。どうしてそんなに、まいったなあ、
って顔をしているんだろう。でもそうか。ということは、彼は私が
佐藤君が男性が恋愛対象であるってことを知らないと思ってたわけ
だ。そして今、彼はその事実直面してどうやら困っている。何か
を隠したまま、私とお付き合いを継続させたかったんだろうか。そ
れは一体なんだろう。きっと、その理由はこれから話してくれるの
だろうけれど。

そんな事を思っていたからだろうか。佐藤君が意を決したかのよ
うに正面に向いていた顔をこちらにぐるり、とまわしてきた。

近くで見ると、やはり整った顔をしている。その整った顔は今、
私を真剣に見つめているのだと思うと、妙な緊張感が生まれてきた。
口元を注意深く見つめていれば、元々ゆっくりとだったからなの
か私の目の錯覚だったのかはわからないけれど、佐藤君が唇を開く

瞬間がまるでスローモーション映像のように私の瞳にはうつった。

唇の形すら、綺麗だ。

そう思ったのと、彼の声が耳に届いたのは同時だった。

「わからないんだ」

「え？」

反射的に聞き返すと、佐藤君はまた正面を向いてしまった。ああ、私は彼の可愛らしい顔を真正面から見たいとどこかで思っていたようだ。無意識下の自分に少し驚く。

「僕は、本当は女性が苦手なだけなんじゃないのになって。ひよつとすると、男性が好きなんじゃなくて、ある種の恐怖症のようになってるのかもしれない」

佐藤君の告白に私は目を丸くする。ええと、それはつまり。

私は頭の中で考えを整理していく。

女性不信、女性恐怖症。女性に嫌悪感を抱く。まあ、とりあえずなんでもいいが、そういった感情を女性に抱きがちな男性がいたでしょう。しかしそれじゃあ、その男性が同性愛者なのかといったらそれはまるで違う話になるだろう。それは、女性に当てはめれば何かのきっかけ、たとえば某かの行為、痴漢であるとか、で、男性全般が恐怖の対象になってしまった。として、その女性は同性愛者か？やはり違うと言えるだろう。

私たちは、まだ16、7そこそこの小坊主、小娘、俗っぽく言えばガキ、である。と同時にとても多感なお年頃だ。不安定で、思い込みも激しいところがあるし、まだまだ自分の考えに確固たる何かを見出せる年齢とはとてもではないが言い難い。そんな我々が、そういう感情を勘違いしてしまう事は、決して有り得ない話ではなからう、とこの時私は結論を下した。

でも、とここで私は疑問を抱いた。

「あの、気分を害さないで聞いてほしいんだけど。今現在の想い人って、あくまでも噂だけれど、同性の幼なじみなんですよ？その人の事は、どうなの？佐藤君は好きじゃないの？そうじゃなくとも今まで好きになった相手は？」

私の質問に、佐藤君は特に不快感を抱かなかったようだ。顎に手をやり、そこなんだ、と声をあげる。

「僕は、ずっとそう思い込んでいたから、幼なじみの事もそういう対象としてみていると思ってた。でもね、少し前に言われた一言で、僕は何もかもわからなくなった」

ほほう。その一言とは一体なんぞや。
心で呟いたすぐあと、彼から答えが返ってくる。

「お前が俺に抱く感情は、友情とどう違うんだ、って」
「！　ほう、それはそれは」
「……とつさに、言い返せなくて。思えば、恋人同士でするような事を今まで好きになった人たちとしたいと思ってたかったかもなっ
て」

恋人同士でするような事。

その一文を聞いて頭の中を流れたあれやこれやは、まあ外れてはいないんだろう。そういうことを、佐藤君は今までしていないということがあるか。

私も誰かと交際した経験がないからわからないけれど、きっと好きな人とはそういった行為もしたくなるのだろう。自然と、求める心も生まれてくる、はずだ、恐らく。

物質的な何かを求めるのは、そもそも若ければ若いほどそういう衝動は大きいんじゃないのだろうか。男性側は特に。わからないけれど。さっきからわからないけど言い過ぎているけれど。

戸惑いつつも、好奇心からなのか。私は気付けば口を開いていた。「キスとかもあまりしたいと思わないっていうこと？ またはしたことがない？」

さすがにこれには答え辛かったんだろう。一拍置いてから、佐藤君が見る見る頬を染めていった。瞳を潤ませて戸惑うその表情は、そんなつもりがなくともなんだか変な気分になる。別に私はどこぞの中年ではないのであるが。可愛すぎる君がいけないんだ、という男前なセリフが私の脳を突き抜けていった。もちろん、声に出して言うほどハッピーな人間ではない。

「その、したことは……」

「！ あるんですな」

なんか若干変な言葉遣いだけど気にしてはいけない。動揺が隠しきれなかったのかもしれないし、単に興味津々になってしまったのかもしれない。案外私も野次馬根性が盛んであったのか。

真っ赤になってうつむく可愛い男の子にどうしたらいいかわからずしばらく無言でいたが、やがて佐藤君はぽつぽつと呟くように話し出してくれた。

「その、なんていうか、僕からというよりも向こうから半ば無理やりっていうか。その時も、気持ち悪いまではいかなかったけど、かといって良くもなく。手を繋ぐくらいで十分だと思えたし、それまたまにじゃれあいみたいのがあればそれでいいな、って」

「ああ……なんか男子ってたまにアグレッシブな遊びをやったのけ

てますのう、そういえば」

なるほどなるほど、と頷きつつ、彼の言葉を聞く。そうか、それならば確かに……微妙、といえるかもしれない。いや、男性を愛する気持ちはあるが、ひよっとすると女性も特別に無理、というわけではないのかもしれないという可能性もある。つまりはどちらも、という人々。そこらへんは詳しくわからないけれど、いずれにせよ、佐藤君が言いたかった真実を大体把握できた。出来た、けれども、はて。

「……私は、なぜあなたと付き合わなければならんの？」

首をこてん、と傾げつつ佐藤君の方を向く。

私の言葉に佐藤君がば、と俯いていた顔をあげる。興奮状態なのか、立ち上がって何かを言おうとした、矢先。

私のお腹が、暴君の如く痙攣を起こした。

「……とても元気な腹の虫だね」

佐藤君が気を遣って言葉を選んでくれる。でも、その綺麗な顔は引き攣っていた。私は気にせず自然に微笑んでみせる。

「優しい言葉をありがとう。……ふむ、現在時刻は17時。暗くなってきたしそろそろ帰るか場所を移動するのがよろしかろうて」

「？ 移動」

「腹が減ると人間それを最優先させる傾向にあるから、どうにも思考が短絡的になっていけない。であるから、空腹は満たすべき。真剣な話し合いをする前ならば尚更。というわけで佐藤君、この後のご予約は？」

とくとくと語る私に、面食らったのだろう。
目を丸くした佐藤君は、立った状態のまま勢いを失って戸惑いの表情を見せた。

「いや、特にありません」

多少情けない声音になっている。なんだか申し訳ないが、目下、最優先事項はこの腹減りをどうにかすることである。

「お家で誰かがご飯を用意していたりは」

「いや、僕の家、両親共働きで、母親がけっこう作り置きしてくれてはいるんだけど、今日は外食用のお金をもらってるんだ」

「それはそれは。ではおいでませ」

「？ おいでませ、ってどこに」

佐藤君の問いかけに、私は微笑んだ。

野田という表札が出ている一軒家。所謂住宅街にあるそれは、ごくごく平凡なものだ。しかし私の隣に立つ男の子は、それをとてもしんしい何かのようにまじまじと口を開いてみつめていた。

なんだかその反応がおかしくて、笑った。

「佐藤君、固まってないで入りなよ」

「……えっ、いやでも」

「別に遠慮しないでどうぞ。誰もいないから」

「ええっ！？」

私の返答に更に驚く佐藤君。なんなのだろう。とにかく私は早くこの空腹をどうにかしたいのだ。

「いいからほら。タダメシ食らうからには手伝ってもらうからそう気にしなさんな。早くはやく」

「お、おじゃま、します」

私の言葉に観念したのか、観念という言葉もなにやらおかしいが、佐藤君は戸惑いつつも玄関へと足を踏み入れた。

リビングに通して、少しだけ待つように告げれば、私は二階の自室へと足を運ぶ。

少し急いで着替える。いつもの部屋着だ。料理するのに格好を気にするのは良くない。佐藤君はもう私の中でお客様っていう立ち位置でもないから、外見を気にかけても仕方がない。

少し早足で階段を駆け下りて、ごめんね、と佐藤君に一声かけると、佐藤君が固まった。予想はしていたけれども。

「……それ」

「中学校時代のジャージ。便利だよ、汚れても気にならないから。ほれ、これをお使い。ブレザーは脱ぎんしゃい、動き辛いだろうから」

四人がけのダイニングテーブルの上にあったエプロンを佐藤君に投げてよこせば、彼は慌ててそれを受け取った。よしよし、言うとおり装着しましたね。

「佐藤君、料理の経験は」

「ごめんなさい、ほとんど……」

「謝らんでよろし。覚えておくと便利よー、今は男も料理作れるとポイントが高い！らしい」

「……………野田さんは、料理作れる男のが好き？」

佐藤君の質問に私は腕をまくりつつ手を洗ってうーん、と声を上

げる。特にそうだからってわけではないけれど、まったくしない人や、家事労働に抵抗のある人よりもやってくれる人のが良いのは確かだ。特に偏見かもしれないけれど、男のするものではない、と言っている種類の方は、日々のお礼を怠る傾向がある気がする。ならない。たとえ全く手伝ってくれずとも、美味しいよ、ありがとう、という言葉の威力ははかりしれない。私は、物心ついた時から毎日当たり前のように家事をこなしているけれども、正直、両親の感謝の言葉がなければ、もっとひねくれていたと思うのだな。

そんな事を頭の中で反芻する家事労働と交えつつ考えながら、私は頷く。

「そうだね、私はいつしよにやってくればかなり嬉しいな」

「！ 僕でも出来ることってなにか、なにしたらいい？」

佐藤君がブレザーだけでなくネクタイも脱ぎ捨てて腕まくりをした。急にやる気を出してどうしたことだろうか。でも非協力的よりずっと嬉しい。私は微笑んでそれじゃあ、と口を開いた。

「あーあー、そんなに正確じゃなくていいんだよ、要は食べやすきやいいんだから」

「そういうもののなの？」

「そうそう。こうやって一回切るごとにくるつとまわして」

「そうやって切るんだあ！」

見本に横でにんじんを切ってみせるだけで、佐藤君は感嘆の声をあげる。なかなかどうして良い生徒だ。微笑ましい思いで私は佐藤君の手元を見やる。

「うん、うまいうまい。あ、にんにくは苦手？」

「！ ううん、むしろ好き」

「よかった。じゃああとは、サラダ作ってもらおうかな？」
「はい！」

大変良いお返事ですね。

「ごめんねー、ぜんっぜん凝った料理でもなんでもなくて。でもご飯はガーリックライスにしたから一手間かかってますよ！」

「いや、十分だよ！カレーって久しぶりかも」

「サラダは個人的な趣向でミモザサラダにしました、召し上がれ」
「へー、これってミモザサラダって言うんだ。いただきます！」

ミモザサラダ。本当は黄身だけ使っただけど、私はもったいないので白身もいっしょに使います。美味しいよ。

サラダとカレー。なんてことない食卓だけれど、やっぱり誰かと向き合って食べるのは美味しい。両親は別に子どもに無関心な親っていうのでは全然なくて、いつも私を気にかけてくれるし時間を少しでも作ってくれようとはするけれど、出張も多いし夜は遅い事がほとんどだ。だからせめて健康的な食生活を、とふたりのぶんのお弁当も作っているし、それが苦痛ではないけれど、それでもやっぱり寂しいって感情はどこかしらあるもので。

「佐藤君の家も、ご両親忙しいんだ？」

「うん。最近は家政婦を雇おうかみたいなのも言ってたかなあ」

「へえ……」

「なんとかやってくれようとはしてたけどそろそろ限界みたい。僕もかまわないよって言ったから、近々そという人が来るんじゃないのかな」

「そうなんだ。じゃあお母さんの料理食べなくなるのちょっと寂しいね」

「うーん、そうだね。でも、両親にそこまで無理もさせたくはない

から、そう我儘も言っていられないし。僕は野田さんみたいに家事を一手に引き受けるとか、そういうことも出来なかったんだから、やっぱりしょうがないかな」

口ぶりから、どうやら佐藤君の家も特に「両親と険悪な状態」というわけではないみたいだ。それでもやはり、仕事が忙しければどこかしら心に空間は出来るもので、なんとなく、私たちは空気でそれを感じ取った。お互いにどこか照れ臭くて、誤魔化すように微笑みあう。

「片付けは僕がやるね。ごちそうになった御礼に」

「あー、そらありがたい。悪いねえ。なんなら明日のお弁当とか作ろっかい？」

「それじゃあきらかに僕のが御礼が足りないんじゃないかな」

「そうかねえ？食器を洗った上に拭いて棚にしまってくれたらほんとになるんじゃないかな」

「それはそこまでしたら作ってくれるってこと？」

「別にかまわんけども。ただかわゆらしいのは作れんよ。ザ・弁当みたいなのか作れんよ」

「なにそれ」

笑う佐藤君につられて私も笑う。ひとしきり久しぶりの人と食べる晩ごはんを楽しんだ。

それから私はお弁当作りを、佐藤君は後片付けをそれぞれやって、無事佐藤君に完成品を渡し、お茶でも飲むわー、とふたつマグカップを用意した、ところで何かを忘れているような気がした。

「……千絵子さん」
「ほっ！？」

マグカップに牛乳を注いでいたところで背後から呼びかけられ、とても間抜けな声をあげてしまった。ああこれお茶ではないけれどもお気になさらず、とか口に出しつつも、なんだか少し動揺している自分がいる。

一体全体なんだというのだろう。どこか圧力のようなものを感じなくもない。冷たいシンクに手をついた彼は、背後から私を囲うようにしている。これでは牛乳が温められない。レンジの前に移動させてくれ。

しかし私の願いもむなしく、佐藤君はそのままの態勢でそう呼んでいい？と訊ねてきたので、お好きになさってくださいえ、と私は返答した。

「ねえ、千絵子さんは、さ。こんな簡単に誰も居ない家に男の子を上げちゃうの？」

「ん？んや。そんなあばずれみたいな真似はしないよ？」

「あばずれって」

私の言いようがおかしかったのか、背後でくつくつと笑い声が聞こえる。

「さっきの話を聞いてはいたけどもさ、でもふたりきりになったところで別に佐藤君が私をどうこうすると思えなかったし。だって女の子が苦手なんですよ？」

「問題は、そこなんだ」

「？そこ」

佐藤君がシンクから手をどかしてくれたので、私は背後にいる彼へと向き直った。振り向けば思った以上に近かったその距離に多少狼狽する。顔、けっこう近いんですね。

「どうして付き合う必要があるのか。千絵子さんはそう訊いたね」

佐藤君の言葉に、私は頷く。

それを見届けたからか、佐藤君はいつかいまばたきをする、すつと口を開いた。

「僕の女性への苦手意識を、払拭する手助けをしてくれないかな。その為にも、僕と交際をしてほしい」

「……ほほう」

「名ばかりの恋人、というわけじゃない。つまりは、公園で話していたように、恋人同士がするようなことを、僕としてほしいんだ」

「それは、ええと」

「うん、手を繋いだりとか、あの、キス、とか」

あまりの出来事に面食らっていたのかわからないが、私はもう一度ほほう、と呟いていた。

というか、そんな、頬を赤らめて言わないでほしい。そこいらの女の子より美しい。

そういえば、先程一回した佐藤君のまばたきは、とてもとても綺麗だった。

まあ、どうでもいいことだけれど。

第3話

まず、頭を整理しよう。しかし、今の私には何かが足りない。はて、それはなんだろうか。そう考えて、私はひらめいた。糖分である。

私はひとり納得して頷くと、牛乳入りのマグカップを持ち上げれば、佐藤君に声をかけて通してもらい、すぐ傍にあるレンジへとふたつのそれを放り込んだ。熱々にしたいので操作盤を押して、3分温める。カップラーメンが出来る時間と同じだ。

「……行動の意味を訊いてもいいかな」

背後から聞こえてくる静かな声に振り向けば、じつとこちらを見つめる佐藤君。腕組をして私に理由を問うている。私はどうしてそんな質問をされるのかわからなくて、目を丸くした。

「当然でしょう。今の自分には理解出来ない事を言われたの。糖分が足りないからだよ！あ、佐藤君も飲むでしょ？ココア」
「……ぶっ」

私の答えの何がそんなにおかしいのか、佐藤君がついに声を上げて笑い出した。

何をそんなに笑う事がある。だって理解出来ないのに、腹は満たされておるのだから、足りないのは糖分であろう。脳にお砂糖、と言うではないか。

首を傾げて彼を見ると、私が疑問符を浮かべた顔をしているのがますますおかしかったのか、佐藤君は肩を揺らして笑う。

いや、ひょっとして、と思う事もあった。人よりも何かずれているところもあるうか、と。しかし、その齟齬はきつと些少なものだ

と今まで信じてきたし、今現在もそう思っている。けれども目の前の佐藤君の様子を見ると、つい数分前の行為は、大変面白いものであったらしい。ふむ。

温め終わったのを知らせる音がリビングに鳴り響き、私はマグカップを取り出す。

スプーンでちよいちよいと張っている膜を取り除き、ココアの粉を入れる。ぐるぐるとかき混ぜて完成。はい、と渡したら、私はリビングのソファへと腰を落ち着かせた。たすん、と隣を叩いて、佐藤君も隣に座るよううながす。

おや。なぜそこで目を細めてこちらを見やるのであろうか。首を傾げるも、佐藤君は特に何を発するでもなく、無言で私に倣った。公園の時とは違い、今度は私の右隣に佐藤君が居る。

こくん、と一口飲めば、脳に糖分が行き渡る錯覚に陥った。なんだか今なら良いこともひらめきそうである。思い込みだとしても、そういった気持ちは大事なはず、だ。

マグカップをテーブルに置いた音がし終わったあと、私は一瞬呼吸を忘れた。なぜならば、物理的に呼吸を塞がれたからである。

綺麗な唇が、平凡な私の唇に吸い付いている。

触れるだけならばキスとか口付けとか、そんな言葉で済ませられるのだが、なんとなく、接吻という単語が私の頭を巡った。意味合い的には同じであるうが、日本人だからだろうか。そちらのがより深い繋がりがあるような感覚になる。

あれこれと、ほぼどうでもいいことを思考していれば、その間も無遠慮に佐藤君の唇は私の唇に好き放題触れ、ちろり、と覗かせた舌が私の下唇を舐めた。

びくん、と肩を跳ねさせて驚いてしまった反射なのか、私は薄く口を開いてしまった。それを待っていたのかはわからないけれど、佐藤君が私の後頭部に手をまわすと、そのままより深い口付けを私にほどこしてきた。

「む……ひゃによ……」

名前を呼ぼうとしたけど無理だ。呂律が回らないところの話じゃない。息苦しい。ぴちゃぴちゃとんだかいやらしい水音まで耳に響いて、私の唾液だったらなんか嫌だなあ、なんて思う。粘膜と粘膜が混ざり合うつて、なんだか物凄く卑猥じゃないだろうか。

それにしても。

恐らく先程私がキスと呼ぶようなものしか彼は経験してない口ぶりなのに、どうしてこんなに手馴れている様子なのだろうか。それとも所謂、接吻を経験済みなのか。

頭の芯が痺れる。何かを注がれているみたいに、ぼんやりと思考が鈍くなる。そこまでいったところで、佐藤君がゆっくりと唇を離れた。

気付けば目には涙が溜まっていて、顔が熱い。息も苦しかったから、はふはふと浅い呼吸を繰り返す。

「……うつわ、やばい」

この時の私は、彼が何を呟いていたかなんて考えられなかった。もし気付いていたならば、違う結末もあつたろうか、と後になって考えたのだけれども、すぐにきつとそれはないな、と一蹴していた。やっと呼吸が落ち着いてきた私の頬に、佐藤君の右手が触れる。

彼の手の平は、温かくも冷たくもなかった。

「……真っ赤だね」

「真っ赤じゃないほうが良かった？」

「うつん、可愛い」

ふふ、と笑ってそんな事を言うあなたのがよほど可愛い顔をしていると思うのだが。けれど今はそんなことどうでもいい。さすがに

ここは憤慨するタイミングだとわかっているのだが、なんだか私はどうにもそういう気になれなかった。なぜであろう。彼にたいして同情的であるからなのか。単に綺麗な彼の顔にまいてしまったからなのか。

なにしろ突然の出来事に驚いてしまって、正しい、と言うとおかしな表現だが、反応が出来なかったのかもしれない。

「ねえ、嫌だった？」

佐藤君の言葉に私は考え込むが、生理的な嫌悪感は無かった、と告げれば、正直な感想だね、と空気で微笑む。うつん、他に思い浮かばなかった。

「僕もね、嫌じゃなかった。女の子に触れても、嫌じゃなかったんだ」

「それは。良かった、でいいのかね」

「うん、良いんじゃないかな？トラウマを克服するという意味では」
「……なるほど」

やっと思考が戻ってきた私は、ぼんやりとしてソファに沈めていた身体を起こす。

「ごめんね、突然。でも、千絵子さんさえ嫌じゃなければ、僕はそのまま千絵子さんと恋人同士でしか出来ない事をしたんだ」

「なんと。それはつまり、私で女の子に対する苦手意識をなくしたいということと相違ないね！？」

「うん、まさにそういうことです」

ふむふむ！何度も頷きつつ、私は援軍を送る心持ちでココアを飲む。

私の行動にあ、と気が付いたのか、佐藤君もいただきます、言
って用意したココアに口を付けた。美味しい、と微笑む彼はやはり
とても可愛らしい。

ひょっとして、私はこの顔にどこかしら弱味があるのだろうか。
でなければ、いくらなんでもろくに話したこともない彼から接吻を
されて憤慨しないのはおかしい。

私もあばずれであつたか。

多少悲しくなりながらも、ならば仕方ない部分もあるう、と納得
する。本能は、しょせん何事にも勝るはずなのだから。

「……でも、何故私に？記憶が確かであるならば、私と佐藤君はま
るで接点がなかったのじゃないかね」

「だから。こんな事言うのはあれだけど、接点のある子にはそんな
馬鹿正直に頼めないし、そういう噂に興味がなさそうな子に声をか
けてみようと思ったんだ。単純だけれど、真面目そうな人の集まる
場所って図書室かなあ、と思って、そこでたびたび千絵子さんを見
かけて。真面目すぎるのもやっぱり難しそうだけれど、お友達との
会話を耳にしたとき、そのへんのバランスが良さそうだって勝手に
思ったんだ。千絵子さんみたいな人なら、ある程度付き合って、
別れられるかなと思って。ミーハーな子は後々大変そうだし」

「おや、なかなか辛辣なお言葉だね」

彼の事はまだまだわからないとはいえ、今までの様子からしてら
しからぬ発言に、私は目を丸くする。

佐藤君は、申し訳なさそうに首を竦めた。

「……ごめん。僕も、やけになってたのかもしれない。好きな人に
気持ちを否定されて、ましてそんなことない、って言い返せなかつ
た自分自身が情けなかったんだ」

「そう、か。うん、そうだね……」

もしも女性が駄目だと判明したならば、いや、むしろその方が、佐藤君にとっては幸せな結末なのかもしれない。だからこそ、彼にとつてこれは大袈裟かもしれないが人生を賭した最大の勝負事なのだ。

お付き合い、か。ふうむ。現状、嫌だという感情は沸かないし、私は彼に対して同情心を抱いている。おまけに、行為も最後までは至らないと約束してくれているし。

流されてる感があまりに否めないが、ここまで話を聞いてしまつて、無理ですさようなら、と言えるような強さも私にはない。操を立てる相手もないのだし、どうにもそういった部分に深いこだわりが持てなかった。

「でもさ、それなら周りには私と付き合つてるって言わないほうがいいよね。そのほうが何かと都合良いだろうし」

「！ 千絵子さん……僕と恋人になつてくれるの」

返答に目を丸くした佐藤君を真正面から見据えて、私は頷いた。

「乗りかかった船つて感じだね。ただ、その、無理な行為は無理つて言うと思う。なるべく応えるようにはするけど。その、それでもいいですか」

「そ、それは全然！むしろ、僕が悪いんだし！」

慌ててそう告げた佐藤君に良かった、と微笑めば、佐藤君も同じように微笑んだ。

「……あの、千絵子さん。もう一回、キスしても良い？」

「ほへ」

「さっきの、嫌じゃなかったって感情、勢いでパニックになつただ

けかもしれないから。冷静になった今の状態で試してみたいんだ」
「ええと、そうか。あの、じゃあ、お手柔らかにお願いします？」
「どうして疑問系なの」
「なんとなく」

ふふ、と笑んだ私に了承を取れば、佐藤君はそつと私に近付いた。先程とは違って、ゆっくりと綺麗な顔が近付いてくる。余裕が出来たからか、彼の顔をじっくりとながめられる。くりくりとした瞳の中が綺麗。伏せる睫毛も綺麗。私を驚かせた唇の柔らかさも、ついさっきの事だから、よく覚えている。

ちゅ、と触れ合う音が耳に届いた。一回目には気づかなかった発見に少し感動しながら、私はゆっくりと目を閉じる。なぜ目を閉じるのか、体験するまでわからなかったけれど、より相手を近くに感じたいからなのかもしれない。

視覚が奪われて、他の五感が冴えていく。触覚、聴覚。少しでも触れられればそのぬくもりを敏感に感じ取ることが出来る。先程とは違い、口腔内というよりも唇を味わうように、佐藤君はやっぱり私の唇を甘噛みする。その延長で、舌をちろり、と出して舐めたり、佐藤君の唇全体で挟まれて、吸われたり。

溶けてきた思考で、それが気持ち良いと感じる。私って、ひよつとして淫乱だったのかな。そんなことまで考えながら、ちろりと伸びる舌はどんな様子なのか見たくなくて、そろり、と瞳を開けてみる。

驚いた事に、てっきり閉じていると思っていた彼の瞳は、ぱつちりと開かれていた。

目を見開いた私に気付けば、瞳で笑った佐藤君は、そつと私の唇を弄んでいた舌を離す。まるで私が見たがっていたことを知っているみたいだ。

ああ、やっぱり、綺麗。

ぼんやりとそんな事ばかり思っていたら、佐藤君が微笑んだ。

「昂って、そう呼んで」

「……え？」

「ふふ、まだぼんやりしてる？かわいい」

頬に手を添えられて、優しい声音でそんなことを言う。私はそれがとても恥ずかしかったけれど、同時に冷えた手の平が気持ちよかった。いや、佐藤君の手が冷えたというよりも、私の頬が熱すぎるのだろうな。先程の行為のせいだと思ったら、なんだかますます温度が上がりそうだった。

私は何かを誤魔化すかのように、ちらり、と佐藤君を見やる。

「え、ええと、あの、す、昂君？」

「うん、そう呼んで」

わかった、と私が頷くと、佐藤君は再度微笑んだ。

それから、ココアをすべて飲み干して、佐藤君は帰った。

駅までの道がわかるのか心配だったから、いっしょに行こうか、と言ったけれど、夜は危ないから、と断られてしまった。なんとも紳士的であると同時に、そんな風に女扱いされると、気恥ずかしい。パタパタと顔を扇ぎつつリビングに戻ると、携帯電話が振動する音が響く。静かにしていると、けっこう聴こえるものである。

私はポケットからそれを取り出せば、登録した覚えのない名前に目を丸くする。通話ボタンを押すと、そこからは先程まで話していた佐藤君の声が聞こえてきた。

『無事駅に着いたよ』

その言葉に、よかった、と私が告げる。そういえば、携帯電話の番号を覚えてくれとさっき佐藤君が言っていたな。何か操作して私

の番号はわかったから、と返されたから、まさかこちらに彼の番号が登録されているとは思わなかった。佐藤昂という名前が、きちんと着信者名に出ている。

私は、彼の言葉に微笑んだ。

『そうか、それはよかった。家までも、気をつけて帰ってね』

『ありがとう。じゃあ、また明日ね、千絵子さん。これからよろしく』

その言葉にこちらこそ、と返事をして、電話を切った。

台所へと足を運べば、片付けようと思っていたマグカップは、綺麗に洗われ、あるべきところに戻されていた。きっと、佐藤君がやってくれたんだ。でも、いつの間に？

「……そういえば、あんまり顔が赤いから顔を洗ってきたらどうだって佐藤君に言われたな」

きっとその間に片付けてくれたのだろう。なんと、好青年である。気付けば私は、よくわからないかたちで終わらせてしまった初めての接吻を、特に悪い記憶として残すこともなく微笑んでいた。

第4話

携帯電話の番号とアドレスを交換し、けれど特別何かをやりとりしたわけでもない。果たして、お付き合いというものが具体的にどういったものかと考えたけれど、そもそもがお付き合いというものを正式にする必要がないのだということに気が付いた。

極端な話、女慣れする為に適度に私と会話をしたり触れたりすればいいわけで、特別に親しくする必要もないだろう。情がわけば、別れも辛くなるし、私にとってもそのほうがいいだろう。

「……ん？あれ？」

今重大なことを心の中で呟いたよな。こんなことが過ぎるということは、ひょっとして私はすでに彼にたいして何か特別な感情を抱いたのだろうか。

嫌いではない。話しやすいし、彼の隣は居心地が悪いわけでもない。そもそもが、特別な感情、所謂、好きとはどんなものだろう。自分に問うてみたけれど、答えは出なかった。糖分が援護をしたところで、答えを出すのは無理だという事くらいはわかったけれど。

「千絵子さん」

「！ 佐藤君」

明日、と言われたけれど具体的に何も口約束をしていない状態だったから驚いた。友人と図書室へと移動する途中で、佐藤君が教室に現れた。出入り口に立つ私の隣に居る友人は目を丸くしている。

「良かった、行き違いになるところだったね」

「どうしたの？」

「せつかく作ってもらったんだし、いつしよに食べたいなと思って
お友だちさえ良ければだけど……」

佐藤君が首を傾げて私に告げる。ああ、そうか。弁当のことか。
確かに同じ場所にて、作った相手と作ってもらった相手が別々に
食べるのはどこかしら妙な感じもする。けれども、そんなに親しく
して良いのだろうか。

周囲は、突然現れた私の存在に戸惑いを覚えるに違いない。佐藤
君は同性愛者として有名であるとは言ったけれど、もちろん彼の容
姿にだって起因しているのだ。私は恋路を邪魔する人間として、学
校中から非難される可能性を孕んでいる。彼は、そのへんどう考え
てるのだろう。

「……あのさ、聞きたいんだけど」

「！ あかり」

私が思考をめぐらしていると、横に居る友人が声をあげた。横田よこた
あかり。私の数少ない友人のひとりである。ちなみに他校に恋人が
いるからか、黒くまつすぐな長髪で佐藤君の隣に並べばえらく画に
なる彼女はしょっちゅう告白をされる。恋人がいるのだと断っても
信じてもらえないことだってしばしばだ。

「ちよつと、ちー！」

「ほ？ おう！」

間の抜けた返事をしてしまったためか、拳骨を額にお見舞いされ
悶絶すれば、佐藤君が千絵子さん！と名前を呼んで私の顔をあげさ
せる。

「だ、大丈夫？ 横田さんて噂通りのキャラクターなんだね」

む？

私は良く、人とずれてるなんて言われたりもするけれど、こういうのは敏感なのだ。

気のせいじゃない。佐藤君の言葉、私に向けるものとは違ってどこか険のある空気を出している。言いようも、何か含んだようなものだし、そんなにわかりやすいものじゃないけれどはつきりと敵意が感じられた。

なんでだかはわからんけど。なんで？……いかん、空腹では考えが纏まらん。

「あら、その噂、どんなものかお聞かせ願いたいもんだわね」

そしてこの友人である。あかりは、自分に向けられる敵意やその他の事は私以上に感じやすいだろう。はつきりと、彼の挑戦状を受け取ったようだ。でもだからなんでこのふたり険悪なわけなの。

ねめつけるような顔で腕を組みつつ、あかりは佐藤君を見やる。しかしそんな彼女の強い視線を真っ直ぐ受けているというのに、

佐藤君は春風の如くそれはそれは爽やかに微笑んで見せた。

「だったらお昼をいつしよにとりながらってどう？」

「名案だと思うわ」

につこりと笑んで発した一言に、あかりはやはり微笑んで応えた。ふたりの間に散ってる火花の意味は一体なんなのだろう。首を傾げつつ、ちらと腕時計を見やる。おっと、こうしてはおれん。

「おふたりさん、話が纏まったんなら行こうか。早くしないと昼を喰いっぱぐれるという事態になる。部室で食べよう。佐藤君、そこで良いかな？教室だと色々まずかるうて」

私の言葉に佐藤君が頷くが早い、私は歩を進める。正直、この空腹は耐えたい。とつとこの空白を埋めないことには、私は心が安まらない。

「……あの子、ほんと食事時になると性格変わるわ。私のウインナーまで奪い去ったくらいだし」

「……すごいね」

早足で目的地へと進みだした背後では、2人が半ば呆れたように言葉をこぼしていたらしいが、今の私の耳にはもちろん届いていない。昼食をとるのが最優先事項なのだから。

部室、というのは、実は私達ふたりしか在籍していない所謂、同好会だ。文芸部、ではないので文芸同好会。反対に、漫画研究同好会は人数が多く、漫画研究部として成立している。なんとも面白い話だ。先輩が卒業してしまって2人きりになった部室は少し寂しいが、その分気楽でもある。元々、何の活動もしていなかったから人が増えようと減ろうと関係ない。

冬は少し寒い為、図書室で昼食をとるのだが、夏はこちらで食べる事も多い。同好会なので元々、資料室という名の倉庫だった教室をあてがわれており、恐らくは六畳と少し程度しかない、きちんと調べたら本当はもっとあるのかもしれないが体感的にはそう錯覚する、であるうと予想されるこの場所は、こじんまりとしたソファと机に、ひとつの棚にびっしりと過去に制作された冊子や小説が置かれている。ちなみに電気ポットが完備だ。

私と佐藤君は隣り合って、あかりは向かいのソファにそれぞれ腰かけた。

「……それで？あなた、千絵子に交際申し込んだってホントなわけ」
「ああ、それは知っているんだ」

「昨日呼び出されたとき一緒に居たんだもの。戻ってきたら気になるし理由は訊くでしょう」

「まあ、そうだね。千絵子さんが言っただんだ？」

私をちらり、と見つめる彼の視線に少し驚いて、おかずを一瞬のどに詰まらせた。いかんいかん。お茶を飲んで無理やり流し込む。すぐ隣に座っているから、距離が近い分なんだか過敏に反応してしまう。2人きりで話しているときよりも緊張するのは、あかりの前だからだろう。

「……あかりは友だちだし、まあ。まずかったかな？」

でも、事情を話すつもりはない。あかりには申し訳ないけど、彼女に知られては色々面倒な事もあるだろうし、そもそもこの歪な関係を彼女が認めてくれるとも思えない。私だって、もしもあかりがそんな事に巻き込まれたら止めただろうし、そんなの恋人ではないだけでただならぬ関係の友達と言われてしまっても仕方がないではないか。

そう、昨日、その事実が気が付いて私は打ちひしがれた。就寝前のベッドで、ひとしきり暴れて、やがてため息を吐いた。認める他ないという現実が、妙に残酷だと感じる。

私は、何がしたいんだろう。今更そんなことを思う。そんな醜い行為をしてまで、私は彼に協力して、得るものなんてないのに。自分はこのままで、善人だったろうか。ひよっとして昴君の素敵なあれこれにあてられてのぼせ上がっているだけなのだろうか。そうなるといよいよもってあばずれでしかない。

一度、是と言った以上、拒否するつもりはない。けれど、これで良かったのだらうかという気持ちはやはり拭えない。彼とはすでに、思い出すだけでも恥ずかしいような接吻をしたのだ。あれ以上だつてひよっとしたらするかもしれない、正直想像できない。

いつかは別れる相手。いや、始まってもない相手。こうやって昼に訪れたのは、意外だった。彼は、私と同じような考えだと思ったから。

そんな佐藤君を見つめる。一応、事情は話さないよ、と目で訴えてみた。

正しくそれを受け取ってくれたのかはわからないが、佐藤君はそんな私の視線を受けて、微笑んだ。

「実は、正式に付き合う事になったんだ。最初僕が勘違いしちゃったんだけど、昨日色々と話合った末にそういうことになって」

「……そうなの？」

佐藤君が何を考えているかわからないが、怪訝な表情でこちらを見るあかりの視線を受けて、とりあえず私は調子を合わせて頷く。

「あんた、別に佐藤君のファンでもなんでもなかったでしょ。なんでまた」

「ううーん、特に断る理由がなかったから、かね。確かに好きかって言われたらわからないって感覚だけど、昨日一緒に帰ってみて、話して、ああ隣に居るのはそう悪くもないなって思ってた」

私の言葉に佐藤君はしばらく目を丸くしていたけれど、やがて頬を染めて微笑めば、ありがとう、と私に告げた。満面の笑みはきらきらしていて眩しい。ああ、本当に綺麗だ。

そんな私たちの空気を一掃するように、ごほん、とひとつ咳払いをしたあかりは、呆れ顔で私を見たあとに、目を眇めて佐藤君へと向き直った。

「佐藤君。もはや噂でもなんでもなく、あなたが同性愛者って事は公然の事実だったと思ったけれど」

うつん、やっぱりそうくるよね。佐藤君、どうするつもりなんだろう。

多少、好奇心の混じった目で彼をみつめていれば、彼はさらりと衝撃的なことを言っただけだ。

「僕はゲイなんじゃない。バイなんだ」

さすがのあかりも驚いたのだろう。口をあんぐりとあけて、間拔けな声をあげる。

「……はあ？」

「でもどちらかというとゲイ寄りだと思うよ。好きになる人は男性が多かったし。あと女の子は集団で騒ぐ子が多くて同年代はちょっと苦手なんだ。だから何人かに好意を告げられた時、もしかたそういう子があらわれたら申し訳ないと思ってそう言った。僕も予想外だったんだ、同年代、学校で好きな女の子ができるなんて」

言って、微笑みながら私を見つめる彼の瞳はとても甘ったるい。そんな顔で見られると、真実ではないとわかっていてもなんだか気恥ずかしかった。

私は思わず、難色を示そうと声をあげる。

「っあの、佐藤君、ちょっとこのタイミングで見ないでくれないかね」

「そうそう、それ」

なぜか私がやめろ、と言おうとしていたのに、佐藤君のがよほど不機嫌顔でこちらを睨むようにさらに見つめてきた。なんだというのか。

「どうして戻ってるの？ 昂って、そう呼んでって言ったじゃない」
「え、あ、ごめん。あのときはその……なんかよくわからない感じで」

「あのとき？」

私の言葉に間髪入れずにあかりがつっこんできた。しまった、口が滑った。

しかし私が慌てて口ごもる前に、昂君はひょうひょうとあかりの疑問に答えた。

「改めて告白したときだよ。あの時は、顔が真っ赤ですごく可愛かったんだ」

「ちょ、えと、す、昂君」

ふふ、と笑って私の頬を撫でる手は、昨日より少し冷たい。というか、あの時っていつのこと言ってるんだろう。もしかしてむにやむにやした時のことじゃないのか。

考えれば考えるほど、私は混乱してしまう。

きつと、今もあの時と同じくらい顔が赤いんだろう。彼の言っているあの時と、私の思うあの時が合っていればこそそのたとえばであるが。

「……ふうん。ま、どこまでが本当かどうかはわからないけど、佐藤君が千絵子を好きだっていう点だけはどうやら本当みたいね」

あかりの言葉に、昂君は当然だよ、と言って微笑む。私は、少し胸の奥が痛んだ。友人を騙してしまった。それに、平然と言っているのはいるけれど、昂君だって好きな人に対する裏切り行為を今宣言してしまったようなものなのに。

私が悶々とそんなことを考えていると、それで、と昴君が真剣な表情で口を開いた。

「実は、お願いがあるんだけど。僕らのこと、口外しないでもらえるか助かる」

「まあ、そのほうがいいでしょうね」

ため息を吐いたあかりは、一言ですべてを把握したらしい。まあ、それはそうなんだよね。

今は学校全体が昴君と幼なじみ、名前はそういえばなんだったろうか、を応援している雰囲気だし、そこにきてぼつと出の私が彼女になりました、なんて。色々な人間を敵にまわしそうだ。それに。

昴君は正直、とても女性に好意を寄せられる機会が多い人間だ。端的に言えばモテる男の子。これだけ可愛い容姿と人柄ならばそうなるのもうなずける。であるからこそ、彼が今、女性とも関係を持てると表明してしまえば、外野はますます騒がしくなるだろう。私達のことは表立って言わないのが無難である。そもそもが、偽りの恋人なのだし、必要性を感じない。

「……でもいいの？佐藤君。この子、別に箸にも棒にもかからないような子じゃないわよ」

「それはもちろん、わかっているよ。だから、大々的に僕らと仲良くなってもらおうかと思ってね」

「僕ら？どういう意味？」

「僕と奏^{かなで}。それぞれ同時に接触してもらえれば反発もそう起きない」

ふたりの話がいよいよ見えなくなってきたところに、昴君はこちらを振り返って微笑む。

「千絵子さんは知ってるかな？ 僕の幼なじみ、奏たかって言うんだ。高柳奏やなぎ。そいつと僕と四人で仲良くなれば、そうそう怪しまれない」

「……え、でも」

「大丈夫。理由はもう用意されてるよ。ねえ、横田さん？」

ますます微笑みを強くする昴君を私は心配になってみつめる。そういう意味じゃないよ、わかってるでしょう！ でも、昴君は何も言わないし、この状況じゃ言えない。

そのときだ。

昴君が、私の手をきゅ、と握った。私は、驚いて一瞬反応してしまったけれど、昴君の顔はあかりに向かっていたので、あかりは気付いていない。

私はなんとなく、その手を握り返す。すると昴君も、今までよりも強い力で私の手を握ってくれた。

忘れていた先程の彼の言葉を反芻して、私はあかりに顔を向ける。目の前の友人は、なんだか悔しそうに唇を噛んでいた。

「……あかり、どうしたの？」

「……少し前に話したでしょう、私の兄が結婚するって」

その言葉に、私はああ、と頷く。あかりは、けっこう自他共に認めるブラコンで、結婚話が決まった時多少荒れた。けれど、相手の女性がとても良い人らしく、最近は晴れ晴れとした様子で敗北宣言をしていたものであったが。それがどうしたというのだろうか。

「実はね、奏のお姉さんも、近々結婚するんだ」

「へー、それはまためでたい。……っておいおい、まさか」

その言葉の意味をわからない私ではない。今は満腹だしな！

「そのまさかよ。……まさか、高柳君があなたの幼なじみだったなんて」

「元々、学校でも話しかけようとしていたみたいだし、接触してるのは時間の問題だったと思うよ」

憂鬱そうなあかりに、昴君が楽しそうに微笑む。どうしてあかりは、こんなに嫌そうな顔をしているのだろう。

「なんか苦手なのよあの人。妙に明るいしなれないし。他人との距離感を正しく取れない人間はどうにも疲れて」

「でも口実が出来れば、僕は他への牽制ができるから正直ありがたい」

「……私にメリットは何もないんだけど」

「僕は、強硬手段に出る事だっと思って考えてる。確かに、女子がどんな反応を起こすかは予想の範疇をそれこそ超えてしまいかもしれないけど、千絵子が無防備にしておくよりはずっといい」

千絵子って、ま、また名前呼ばれた。

どきりとして、繋いだままだった手を離そうとすれば、昴君はそれを許してくれない。

ただ握っていただけの手が、一本いっぼんの指を使って絡みとられる。指と指を交差して私達の手は先程よりも深く繋がると、昴君は指の腹をつかって私の手をゆっくりと撫でてくる。なんだかいやらしい手つきに、私は声をあげそうになった。

というかなんなのだろう。この手つきは。すごく抗議したい。

混乱に陥れられた私は、この時2人の会話の意味を全く考えられなくなり、話自体もあまりきちんと聞いていられなかった。終始小刻みに動く彼の手が、どうにも気になってしまつて。

あかりが鋭い瞳で昴君を睨みつけていた事も、それを受けて昴君が微笑んでいた事も、やはり全く気付いていなかった。

「……脅すつもり？」

「穏便に済ませたいだけなんだよ。僕だって、彼女を守りたい。傷付いてほしくはない。けれどそれ以上に嫌なんだ、他の男が千絵子を見るのが」

「まさか、そんなに独占欲が強い男だなんて思わなかったわ」

「どうしても、だめかな」

「……はー。わかった、わかったわよ。どっちみち、これから親戚付き合いもしくちやいけなだろうし、まあ、今から交流を深めて苦手意識をなくす努力をするのも悪くないわ」

「よかった」

にっこりと微笑んだ昴君の手が、やっと私から離れた頃には、2人の会話は終わっていた。

「……って千絵子。顔真っ赤よ、大丈夫？」

「へいつ!？」

あかりの指摘にいつぱいいっぱいになった私は、ますます顔を真っ赤に染め上げてしまったらしい。覗き込んだ昴君が可愛い、と微笑むその顔に、ついに昴君のが綺麗だよ、と声に出して言ってしまったのは醜態以外のなにものでもなかった。

第5話

「まさか、あかりのお兄さんと昴君の幼なじみ……奏君だっけ？のお姉さんが結婚するなんてまだずいぶんとすごい偶然があるものなんだねえ」

「そうだね」

ほへえ、と妙な声を上げつつ話す私に相槌を打った昴君は、食べている間ずっと誉めてくれていたお弁当を食べ終え、ペットボトルのお茶を一口飲んでいる。ちなみに私は家から持ってきたものを持参している。どうせ弁当用意するから、飲み物も一緒に用意するのはそれほど手間じゃないのだ。

あかりは何を思ったか、居心地が微妙だから先に戻るわ、と言って少し前に教室へ戻ってしまったので、今はふたりきりである。なんでだろう、さっきまでの変な緊迫感がなくなって、だはー、と長い息を吐き出してしまふ。

「ずいぶん緊張してたみたい？」

「わかった？」

あはは、と苦笑を漏らして再度短く息を吐き、私は話を続けた。

「あかりは鋭い人間だから……彼女に嘘吐くってえらい緊張するんだよねえ。まあ、罪悪感とは別としてさ」

「そうだね」

私の言葉に昴君も首肯する。

「きつと横田さんは、ほとんど信じていないんじゃないかな」

彼の予想か確信かわからないその口ぶりに、しかし私は完全にそうだろうな、と考えていた。きつと、あかりは何もかも信じていないのだろう。けれど何も指摘しないでいてくれたのは、彼女が私を信用してくれているからだ。心配していないわけでは決してないのだろうに、最後の判断を私に任せて、見守る役に徹すると、きつと無言で約束してくれたのだ。

友人の気遣いに少し心が温かくなると同時に、先程口にした罪悪感からか、ちくりと胸が痛んだ。

私がしばらく無言でいると、昴君も黙って正面を向いていたが、やがて私の方へと振り返れば眉尻をきゅ、と下げて、なんとも情けない表情になった。どうしたのだろう。

「……ごめんね」

「？ 昴君」

「僕の嘘に付き合わせちゃった」

その言葉に私は目を丸くして固まる。

いいよ、と言って笑ってしまえば済んだけれど、私はそうできなかった。だって私は、全然いいよ、と思えていないのだ。そこを曲げて口に出すのは、馬鹿正直かと言われればそうだけれど出来ずに、結局無言で微笑むだけになってしまった。

決めたのは私で、けれども何がしたいのかわからないという感情はやはり同じで。

やっぱりやめる、と言うのは簡単なのだけれど、昴君の内情を思えば、どうにもそれは言えなかった。

もしも自分ならば、と。やはり考えてしまう。

私ならば、あかりに恋心を抱いてしまうようなものなのだろう。

私はそんな感情抱いたことないからわからない。けれどそうだった

ら、きつと考えても答えは出せずに、いくら大好きな糖分を摂取したところで、私の思考はそれ以上すすまないのだろう。

想い人に、自身の心を否定されるのは、一体どれ程の苦痛だろうか。

君は今、傷付いているのかい？なんて、訊けるはずもない。けれど、想像してしまうんだ。ない頭で、考えてしまう。そうになると、私は息が苦しくなって、彼をそこから解放できるのならば、協力したいと願ってしまったのだ。

綺麗なその顔が、歪み病んでいくのを、どうしたって見たくなくなつた。

私のその表情を見て、何を思ったのか、昴君は苦しそうに顔を歪ませた。あれれ、いちばん見たくないとか思っちゃってた表情されちゃった、なんでだろう。

私は疑問符を浮かべた顔でじつと彼を見つめ返していれば、やがて昴君の右手が私に近付いてきた。

長くもなく、短くもない。はつきりと黒でもなく、茶でもない。真っ直ぐというほどでもないけれどくせっ毛まではいかない、何もかも中途半端な私の髪。

彼の手が、さらに、と私のそれに触れると、少しだけ隠していた私の顔をもっとはつきり見る為なのか、少しだけ取って私の耳にかける。

手が耳に触れた瞬間、くすぐったさに私は肩をほんの少しだけ揺らした。

「……もしも」

「え？」

「もしも、本当に僕が、千絵子さんを好きだって言ったら、どうする？」

「どうって」

「あの時、僕の噂を知らなくて、ただ純粹に告白をされていたら、

どうしてた？」

いちばん最初に、告白されたとき？

じっと見つめる彼の視線がなんともいえなくて視線をさまよわせつつも、私はなんとか口を開く。

「……断ってた、と、思うけど」

だって、理由がない。

もしも昴君が本当に私を好きだと言ってくれるならば、私も同じ気持ちを持っていない限り応えてはいけない。人として、それは守らなければならぬことだと、思う。

その答えに、昴君は苦笑して、ため息を吐く。なぜ、そんな悲しそうに笑うんだい。わかんないよ、昴君。

気付けば眉間に皺を寄せて考え込んでいた私は、持参していた紅茶を一口飲み込めば、ちなみにこだわりが特にないのでなんの種類かはわからないがでかど缶に紅茶と書いていたパックになったものを購入している、なんとなく頭の中が冴えた気がした。少量だが甘味も入っている。

「……でも」

「！ 千絵子さん」

静かにつぶやくように声をあげた私を、まじまじとみつめてくる昴君の顔を、私もじっと見つめ返した。

「……今だったら、どうかな」

「え」

「断っていたかもしれないけれど……でも、そのあとたとえば、私の存在を抹消されてしまったら、悲しいと思う」

「……………」

「廊下ですれ違っても、挨拶どころか目も合わせてくれなくなつて、気が付いたら小さく手を振ってくれたりとか。名前呼んでくれたりとか。そんなのが、なんもなくなつたら、いやかなあ」

「千絵子さん」

「あれなんかもう友だち気取り？やだねえ、こんな図々しい奴じゃないはずんだけど。ごめんよう、なんかきもち悪いねははは」

「千絵子」

あれ？

言葉を遮られたと思つたら、なんか気付いたら。
抱きしめられてます？

「……昂君？」

「なんなのもう……超かわいい」

「え？いやあの、す」

名前を呼ぼうとしたら、頬に唇が触れた。それに驚いて言葉を切れば、次に降りてきたのは唇へのキスだった。

キス、ではない。

でした。これは、接吻です。

息が苦しい。どうしたらいいのかわからない。じたばたしていると、昂君が唇を離して微笑んだ。

「鼻で呼吸すればいいんだよ」

くすぐすと微笑みながらそう耳元で囁く。ちよつと、くすぐったいですが！

というか多分そうだろうなとわかってるし苦しいからいくらかそうしてるんだけど足りないんだよ結局！口を塞がれるってこれほど

苦しいのだね！

「それより、あの、なんで？」

「？　なんでって」

息が整って、普通に喋れるようになった私の質問に、昂君はわからない、といった風情でこてん、と首を傾げる。やめてください、可愛いです。

「だって、どうしてキスしたの？　必要ないんじゃないの？　だってキスはもう大丈夫そうってわかった、ん、でしょ？」

「……千絵子」

「へっ」

私の言葉がお気に召さないのか。わからないけれどやれやれ、といった感じでため息を吐きつつ首を振る昂君。なんなのですか、一体。

「僕は言ったでしょう。名実共に恋人のような行為がしたいって」

「……言った、けど」

「それはただ身体を触れ合わせるって意味じゃないよ！　かわいいって言ってるのだって本心だし、抱きしめたいって思った時じゃないか、僕はそういう行動に出ないよ」

ええー？　それって……　なんか、よくわからない。普通の恋人とそれだとどう違うのか？

私が混乱しているのがわかったのだろう。苦笑して私の頭をゆっくりと撫でる昂君は、とても優しく微笑んでいた。

ああ、また。

彼のこういった表情のひとつで、世界は止まる。時間が流れなく

なる。

「ねえ、別れるって前提で考えるのやめない？」

そんな中、彼の発した言葉の意味を理解するのに多少時間がかかってしまった。

数秒遅れて反応すれば、狼狽して一歩ずり、と後退する。

しかし、そんな私の腕を、彼がしっかりと握った。ますます狼狽した私は、ふるふると数回首を振る。

「だって、でも」

「お願い、千絵子さん。僕と恋愛の練習しよう。女の子とちゃんと付き合った事って、今までないんだ。だから、最初の相手は千絵子さんがいい」

「だから、練習なんでしょう？」

「ゴールは、別れじゃないよ。いいじゃないか、たとえばこのまま付き合っても。どちらかが他の人間を好きになりでもしたら話は別だけど。僕は、いいかげん実らない恋にも疲れたんだ。卑怯だって言われてもかまわない。忘れさせて、千絵子さん」

「昴君」

「千絵子さんの存在で、僕の奏への気持ち全部忘れさせてよ」

なんだそれ。

ええと。ええと？

「ちょっと自動販売機」

「別にココアとか買いに行かなくてもいいでしょ」

彼の言葉に、ぴくり、と反応する。立ち上がりかけた私の肩をつかんで留まらせるとは。こやつ。

「なぜわかったのかね」

「糖分、でしょ。いいじゃない難しく考えなくたって。僕らは確かに飯の恋人かもしれないけど、いつか飯の部分がなくなる可能性だってあるわけでしょ？」

「……昴君は、私のこと好きじゃないでしょうに」

「少しでも好意がなきゃ、一緒になんていたくないよ」

「ふーむ……」

眉間に皺を寄せつつ考え込む私に、にやり、と笑ってみせた彼の顔は、今までにない表情だった。

私の身体を引き寄せると、何を思ったのか私と共にどさ、とソファに倒れこむ。

所謂、押し倒されている状態になった。

「きっと、他の女の子だったら触れられないのかもしれない」

「え？え、いやいやちよつと！」

言われた意味を把握する前に、昴君の手が私の身体をまさぐるうとする。

「昴君、ちよつと、やめて！」

「やだ」

その言葉に衝撃を覚えて目を見開く。昴君をうかがえば、真剣なその瞳と真正面から向き合ってしまったて、私はどんどん怖くなってしまう。

今は、彼の手が私の腕を力強くおさえこんでいた。

「おねがい、やめて」

かすれたような声で呟いて、もう一度彼をみつめる。すると、昂君の瞳が揺らいだ。

……なんなのさ。その哀しそうな顔は、なんでなのさ。

「……じゃあ、お願い。約束しょ？」

「……………やく、そく」

「さっきの話。僕たちは、お互いに外に好きな人が出来ない限り、恋人同士」

「でも」

「僕は、千絵子を道具として扱いたいんじゃないんだ。こんな風に、押さえ込んで、こんな行為だけを繰り返されるのなんて、嫌でしょう？」

昂君は、言つて、纏め上げた私の腕を解放すれば、ひとつ息を吐き出した。わからないけれど、どこもなく自分自身に呆れているかのようなため息だ。

先程の乱暴な行為とは打って変わって、昂君は壊れ物に触るかのようにつつくりと私の身体に触れた。それでも、さっきの記憶が残っているからか、私はついついびくり、と震えてしまう。

「……ごめん、怖かったよね。ごめん」

「ごめんね、と謝罪の言葉を繰り返しながら、彼がゆっくりと私の頭を撫でる。掴まれていた手首が少し赤くなっているのを確認すると、昂君は私の手を取って赤くなった箇所を唇を寄せた。

触れるだけのそれは何度も施され、その優しい行為にますます涙が出てくる。

「昂君、私は、なんか、駄目だった？」

私の涙混じりの声に、昴君は静かに首を振ると、起きれる？と言
って私の背中に腕を回すと、ゆっくりとソファに座らせてくれた。
押し倒された相手に起こされるとはこれいかに。

涙がたまった情けない顔の私に困った顔を向けながら、昴君は私
の瞼に口付けた。なんですかね、今日は皮膚接触が多いですね。

「泣かないで」

「泣かせないで」

反射で返した私の言葉に目を見開けば、昴君はごもつとも、と咳
いて頂垂れた。その様子に多少は溜飲が下がる思いがすれば、私は
小さく微笑む。

その表情に、昴君がやつと安心したかのように微笑を返した。

「泣かせたかったわけじゃないんだよ。ただね、さっきも言ったけ
れど、僕は千絵子さんを道具にしたいわけじゃないんだ」

「私は別に道具じゃないよ」

「でも、僕となるべく学校で関わらないようにしようって思ったた
でしょう」

え。

「それだけじゃない。こうやって他愛もない話をしたり、お昼を食
べたり放課後の時間や休日の時間を一緒に過ごそうとか、そういう
ことだってする必要がないって思っていたんじゃない？」

え。え。

ちよつとまで、なぜ知っている。

「わかるよ、反応見てればそのくらい。今日、教室に来たときだって心底不思議そうな顔してたし、横田さんの前であまり一緒にいるところ見られたくないんだなって思ったもの」

「……そうだけれどもさ。そのほうが色々都合が良いんじゃないのかい」

「だから。最初、確かに僕はいつか別れるって言ったよ、それはごめん。でもね、僕も、終わりを想定して関係を築こうと思ったら、やっぱり寂しいって思うんだ。千絵子さんがそう思ってくれたように。だから、仮とかそうじゃないとか、あまり考えすぎるのやめようって思ったんだ」

「昴君」

ぽかん、と間抜けな顔で見つめる私に微笑んで、昴君はふわりと笑めば、一瞬だけ触れる程度のキスを、私の唇に落とした。

な、ふいうちは、恥ずかしい！

真っ赤になった私の顔に、微笑んで彼が可愛い、と告げる。だからそれも恥ずかしいのだが。

「僕たちは、まだ恋人って堂々と言えない関係だと確かに思う。でも、いつか終わるんじゃない、ここから始まるって考えられないかな」

「……はじまる、ですか」

「うん。やっている行為は本当の恋人となんら変わらないんだし。行為に気持ちを追いつくように、これからゆつくりと、お互いを知っていかない？」

「昴君は、それでいいの？」

「もちろん。良くなかったらこんなこと言わないよ。千絵子さんは？」

気持ちが追いつくまで、仮の恋人。なんだかとてもややこしい話

だ。

「ちょっと」

「自販機はいいから」

ちつ。なぜわかる。

私はひとつ息を吐き出せば、覚悟するかのように、頷いた。

「わかった。そっちのほうが、ずっと健康的だもんね。うむ、どんとこーい」

「……最後の宣言がよくわかんないけど」

ふふ、と笑って、昴君は右手を差し出した。

「これから改めて、よろしく願いします、千絵子」

「！ よ、ろしく。す、昴」

私はされた行為を真似しただけなのに、呼び捨てにされた昴君は、目を見開いてなぜか頬を染め上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1799z/>

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

2011年12月27日23時49分発行